

巻頭言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00064265

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



巻頭言

本誌刊行の母体ともいふべき金沢古典文学研究会も、発足以来ついに十年を数えた。十年一昔というが、今さらながら、年月の移りゆく速さを実感する。例会研究発表も本年三月にて百回を迎えた。会スタート後、約一年経過した昭和四十六年十二月三日、金沢大学附属図書館三階大ゼミナル室にて、寒さの厳しい中で第一回例会が行われた記憶は、不思議なほど鮮明である。

このたび、このささやかな例会研究発表の第百回を記念して、場所も同じ附属図書館三階大ゼミナル室にて、記念行事を挙行した。研究発表と講演が催され、市民と学生にて満員の聴衆を集め、盛況裡に会を持つことができたのも、関係各位の御協力の賜物であると、うれしく思っている。

それにしても、この十年間は同人にとりいろいろなことがあった。大にしては、昭和四十八年十月二十七日から三日間開催の説話文学会金沢大会に向けての一致協力、小にしては毎月の輪読会を通しての議論百出など想い出は尽きない。

最近同人一同等しく感ずることは、学会で上京し、研究発表及び質疑応答に直接加わったり、拝聴して受ける、研究上の刺激の大きさである。今や、地方文化の時代であるという。地方文化のあるべき姿は、識者の言の如く、中央のそのミニチュア版であってはならぬ。しかし、真に新しいタイプの文化こそ、中央の文化との絶えざる接触を通して育まれることも、また事実である。われわれはこの静謐な城下町金沢で学問する意義を自覚し、小事に安住することなく、中央での関係学会開催の際には積極的に参加し、未熟ながらも独自の研究を推進していきたいと意欲している。

諸賢の従前にもまさる御支援と御叱正を、切にお願いする次第である。

昭和五十五年五月

金沢古典文学研究会一同